

結 yui

八十八膳献穀会 会報

第五号

お田植祭が無事済んでこれから稔りの秋まで澤山の仕事がある。田水の管理、畦の草刈り、田の草取り、等々、稲の穂が実れば鳥除けの網張りに汗を流す。愈々、抜穂祭だ。豊年だ。黄金色に実った稲穂が風に波立つ。

稔田の風の匂ひが社務所まで

稲の香りが遠くまで流れる。抜穂祭当日平商校生の刈女も馴れた手付きで稲を刈る。園児も奉耕会員も約五アールの田いっぱい人が溢れる。稲架を組む人、稲を刈る人、稲を束ねる人、掛ける人、それぞれが手際よく正確に作業は進んでゆく。短時間で終る。

神の田に笑顔あふるる収穫祭

抜穂祭も目出度く終り田の脇に設けられた直会の席に官司始め奉耕会員、村の人達の顔が並ぶ。奉耕会々長の発声で祝宴に移る。

豊年の乾杯の声の揃へけり

直会にはぎやかに果てるともなく続く。日もあらたまり、脱穀、稲架の片付け、そして献饌の準備と農耕儀礼の傳承に会員の活躍は続けられる。私も会員の一人として今後も微力ながら尽したい。

(献穀会奉耕会員 熊野神社総代)

入会案内

飯野八幡宮八十八膳献穀会 会員募集

- 奉耕会員 二十五名
- 賛助会員 五十名
- 特別会員 八名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には糯米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と、風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解してさらに受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解頂き、多くの皆様のご入会くださるようお願い致します。

結 yui No.5

発行日 平成十四年五月二十七日
 発行所 八十八膳献穀会
 〒九七〇 八〇二六
 福島県いわき市平八幡小路八十四
 飯野八幡宮社務所内
 〇二四六 二二 一四四四
 Email: ino@jinja.jp
 発行責任者 飯野 光世

田んぼの史前帰化植物

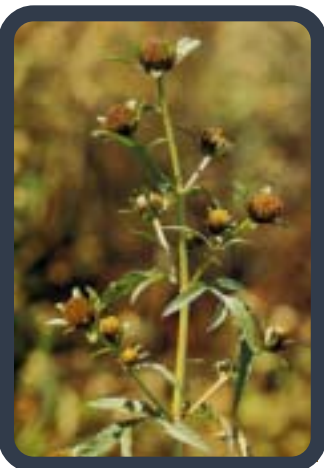
湯澤 陽一

稲刈りの後の田んぼは稲に替わり水田雑草が主役となる。カヤツリグサ、コナギ、イヌビエ、タウコギ、タカサプロウその他だ。春に水田が耕される前はタネツケバナ、スズメノテッポウなどが群生する。田の畦道などにはイヌタデ、ポントクタデ、クサネム、ソコクサ、トキンソウなどが普通だ。

これらの植物はごく普通に見られる種で、もともと日本に自生していた植物と思われていた。これに疑問をもったのは故前川文夫博士(東大)である。博士が中国南部で軍隊生活を送っていたとき、日本では水田や田畑のように耕作により定期的に生育地が攪乱されるところに多いこれらの植物が、中国では水田は勿論やや湿った環境ならどこにでも生育していることに気付いたのである。それらの植物の世界での分布をしらべると、中国だけではなく東南アジアの亜熱帯地方に広く分布していることが分かった。そこは我々が主食としているイネの故郷でもある。

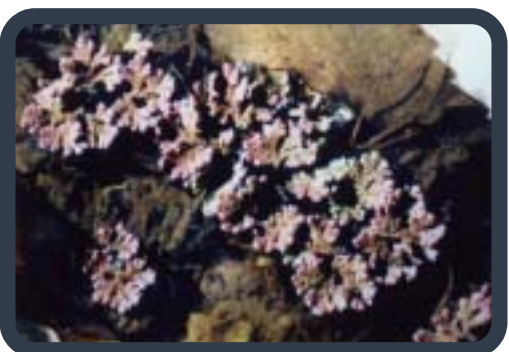
前川博士は、これらの植物は縄文時代から弥生時代にかけて耕作文化が日本に伝わると同時にイネと共に持ち込まれた随伴植物ではないかと考えた。そして、有史以前の人々の移住交流に伴い持ち込まれた帰化植物と云う意味で、史前帰化植物と名づけたのである。夏の水田や田畑の雑草の多くはこの史前帰化植物であるとした。

これらの植物は南方に多く、しかも一年中青々としている植物群である。しかし、日本では夏を中



タウコギ

心に繁り冬には多くは地上部を枯らし種子や地下茎で越冬する。すなわち彼等の生活の本拠は南方の暖地であり、日本に帰



暖地では田の雑草の1つであるオオアカウキクサ(須賀川市)

化したものの何とか条件のよくない環境に適応しているのである。西日本の縄文・弥生遺跡の水田跡の土に含まれる雑草の種子や花粉の分析から、史前帰化植物の記録を掘り起こすことに成功している。

イネとその栽培技術が日本に伝えられた経路にはいろいろな説がある。古代人は海を渡る航海術を身につけていたようだ。長期航海のため、食料や水をはじめ家畜まで船に乗せて新しい天地を求め旅に出たようだ。その食料の中に雑草の種子が混じっていたのだらう。古代人が原始的な舟で日本に到達するためには多くの困難があったことだ。史前帰化植物達も日本に到達したものは、幸運にめぐまれた限られた種子達であった。それらは維管束植物だけでなく、ウキゴケやシダ植物のオオアカウキクサなども含まれていた。胞子の形で他の種子などに混じり持ち込まれたものである。

これら史前帰化植物の子孫達は今農薬と云う彼等にとっては考えてもいなかった人為的インパクトにより生存が脅かされている。ウキゴケ、オオアカウキクサ、オオアブノメなどがつては水田雑草であったものが、今では絶滅危惧種に指定されるまでになつてしまった。彼等史前帰化植物達は今後どのような運命をたどるのであるか。

(いわき市文化財保護審議会委員 理学博士)

写真 オオアカウキクサ 湯澤 陽一
タウコギ 『日本の野生植物 草本 合弁花類』平凡社

神饌について 飯野 光世

神社の祭礼には必ず神様にお供えものをします。そのお供えする飲食の総称を「神饌」古くは「ミケ」と言いました。神社の祭において、神様に神饌を奉りもてなすということは、神と人が共に食事をする中心となる大切な行事です。それは、神饌を神様にお供えし、丁寧なお祭りをした後で、その神気のこもった神饌をお下げし、ご奉仕した神職、総代、氏子の方々でお神酒などを頂く。直会です。まさに神人合一の境地です。

祭礼の基本は賓客をおもてなしすることに似ているといえます。賓客をお迎えするにあたり、家の内外を清掃し普段しまっている掛け軸など床の間に飾り、お料理の材料（新鮮な）をそろえ、おいしいお酒などを準備します。そして、いまか、いまかと来訪をお待ちし、おいでになると、「ご主人はその家の最も良い客間にお通しし、丁寧なご挨拶をします。その間、家の人は、特に子供たちは「いまお客様がおいでになるから静かにしなさい」などと言われ、お客様が帰るまでじっと我慢を待っているから静かにしなさい」とは、別に子供だけではないでしょう。さて、お客様にお酒やお料理が出され無事にお帰りになると、家の中はなんともしわれぬ安堵感が広まることでしょう。

こう述べてみると、まさに神様のおもてなしとよく似ていることに気付くでしょう。祭礼の緊張が昇神の儀により、滞りなく終了すると参列者一同ほっとし、直会となり和楽の一時となるのです。神と人とのかわり、このもてなしつつ待つことに他ならないのではないのでしょうか。緊張感の後の安堵感。私はこの安堵感がとても気に入っています。

（飯野八幡宮 宮司）



俳句で綴る八十八膳

加沢 嘉孝

飯野八幡宮では毎年九月十五日に古式豊かな大祭が斉行される。なかでも八十八膳献饌の神事は県の重要無形民俗文化財に指定されている。この八十八膳献饌の神事に使われる糯米は、中塩の神田で耕作され、九月十五日の大祭にお供えするため一年間に亘り、奉耕会員の人達によって維持されている。そこで年始めから稲の収穫までの主な作業と行事を追って拙い自作の俳句を配しながら綴って見たい。

先ず年の始めの一月六日に農立て祭りがある。この祀りは田畑の神々に豊作を祈念する予祝の行事である。

鳥よぶ声高だかと鋤始

一月は未だ寒く土も凍っている。しかし土には春の息吹きが感じられる。

鋤入れし土の匂ひの春めけり

田打ち祭はお田植の準備をするため田を耕し代掻きをする。神田の周囲の畦を泥で塗り固め水漏れやよそからの浸水を防ぐためガッチリ塗り上げる。畦塗りは手作業である。腰も痛む。泥も跳ねる。

畦塗りを終いたる顔の泥光る



田に水を引くための水口を作る。同時に水口祀りをやる。木の枝や花をさし供え物をして田の神を祀る。本来なら苗代に種を播くとき豊作を祈念して祝う行事である。

水口祭水面に幣の揺れてをり

準備も備へ愈々、お田植祭当日となる。

神田の田植始めの花火かな

十一時お田植祭開始、近くの畦から大筒の花火が打ち上げられる。

黒鳥帽子白丁の列御田植

熊野神社の社務所から平商校生扮する早乙女が赤い襷に菅笠、緋のモンペも初々しく奉耕会員の方々と列をなして静かに神前に至る。式が終ると園児たちも混じわり、ニギニギしく神田に入る。

御田植泥田に足を取られけり

園児も早乙女も泥田は苦手だ。

早乙女の泥より抜きし脛白し